新型インフルエンザ流行と検査体制

WHO によると、2009 年 7 月 6 日現在、新型インフルエンザの確定症例は世界 135 カ国から 94,512 名が報告されており、そのうち 429 名の死亡例が確認されています。国内では、全 47 都道府県から患者発生の報告があり、7 月 23 日午前 11 時の時点で、4,689 例の確定例が報告されていますが、これまで死亡例の報告はありません。

一方、沖縄県では 6 月 29 日に当研究所が実施した遺伝子検査により県内初の新型インフルエンザ患者が確認されました。患者は海外渡航歴があり、渡航先での感染が考えられました。その後も県内および在沖米軍基地内において、海外渡航者から新型インフルエンザが相次いで確認され、これらを感染源とした 2 次感染例が発生しました。さらに感染経路が不明な患者も増加しており、患者数は 7 月 24 日現在、本島中南部地域を中心に 143 名が確認されています。

患者は日々確認されており、さらに今後は県全体へ拡大することが予想されます。感染を予防するためには、手洗い・うがいを徹底することが重要です。

新型インフルエンザと検査：新型インフルエンザは、急な発熱や咳、咽頭痛などを主な臨床症状とする急性呼吸器疾患で、季節性インフルエンザとほぼ同様の症状を示します。アメリカやメキシコの報告では、下痢・嘔吐・腹痛などの消化器症状が特徴とされていますが、日本の患者においてはあまり特徴的ではありません。

現時点では、地方衛生研究所におけるポリメラーゼ連鎖反応（PCR）による遺伝子検査によってのみ確定診断が得られます。この検査法は検出感度が優れており、医療機関で実施された迅速診断キットでA型陰性の場合でも、新型インフルエンザの感染を発見することが可能です。

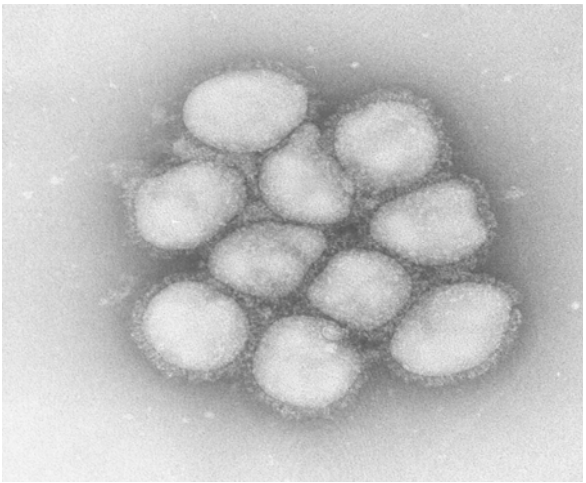

写真 1．新型インフルエンザ A（H1N1）電子顕微鏡写真（国立感染症研究所提供）

写真 2．安全キャビネット内での検査

当研究所での新型インフルエンザの検査は、検査員 6 名体制で実施しています。検査の方法は、リアルタイム PCR 法という方法により行います。この検査法により、一度の検査で新型インフルエンザと季節性インフルエンザを見分けることができます。検査を開始してから結果がでるまでの時間は約 5 時間を要します。今後は、新型インフルエンザの治療薬であるオセルタミビル（タミフル）に対する耐性ウイルスの出現を監視するため、ウイルス遺伝子の解析を実施していきます。

【衛生科学班】